



Title	之麻・也麻小考
Author(s)	八木, 穀
Citation	語文. 1952, 7, p. 31-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68412
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

之 麻 · 也 麻 小 考

八 木 穀

これは遣新羅使の一行が壹岐に着いた時、その中の一人の雪連
宅満が死んだので、葛井連子老の作った挽歌の一首である。そ
れで、この歌だけ考へる時に他の人が作った歌には

……等保能久爾 伊麻太毛都可受 也麻等平毛 登保久左可
里且 伊波我禰乃 安良伎之麻禰爾 夜行里須流君 (三六八)

(一)

万葉集復元への方法は、色々あらうが訓読資料による韻字推定と本文改変（「萬葉」第四号「萬葉集本文批評の『方法』」佐竹昭広氏）といふことが有力な方法として理論づけようとされてゐる。以下論するところは、佐竹氏言ふところの訓読資料によるものではないが、ひろく万葉集の本文批評の基礎的な条件として、更にひとつ操作を必要とするのではなからうかといふわたくしの考へである。

万葉集卷十五、遣新羅使の歌中に、……伎美也、之麻、我久礼奴流
(三六九二) とあるのを、新校万葉集および佐竹氏は……伎美
之 (佐竹氏はこれは元のまゝ也) 也、麻我久奴流と本文改変を試み
てをられる。この本文改変 (新校萬葉集では略号意改) は万葉集
總积第十一卷 (昭和11・9刊) に見え、昭和廿一年九日に「伐る
船木」 (「國語國文」第15卷第6号) と題した論文において、佐

伯梅友氏は

波之家也思 都麻毛古杼毛母 多可多加爾 麻都良卒伎美也
之麻我久礼奴流 (卷十五・三六九二)

そこで私は「也之」を「之也」の誤として
待つらむ君し山隠れぬる

(三六九三)

……世の中の人の嘆きは 相思はぬ 君にあれやも 秋
萩の 散らへる野べの 初尾花 仮廬にふきて 雲離れ
き国べの露霜の 寒き山辺に 宿せるらむ (三六九一)
紅葉の散りなむ山に宿りぬる君を待つらむ人しかなしも

と訓んではどうかと考へて、これも新校にさうさせて頂いたのである。上に係助詞がなくては連体形で止めた例は

といつて、卷一〇・一九九四、卷一一・二八三二、卷一二・二九六四を挙げてをられる。

ところが最近、この佐伯説の補強を企てて佐竹昭広氏が、「島隱るか山隱るか」（「白珠」昭和廿七年九月）といふ論を寄せられてゐるのである。その要旨は三六九二の反歌中「伎美也之麻我久礼奴流」の「也」「之」を佐伯説の如く倒置しないで、次のやうな合理説を発明せられてゐるのである。すなはち、「之」は「也」の重点「ミ」であったのであるが、それを筆写者が誤写したので「君や、やま……」とならずに「君や、しま……」となつたのである。と説明される。そして氏は集中然様の例を數箇拾つて來、もとの正しい本文は「伎美也く麻我久礼奴流」とし、係結の呼応についての疑問も解消したとされるのである。わたくしは両氏の「山隱り」への意改の論に残念ながら賛成できない。両氏は何故意改されるか、佐竹氏については明らかでないが、恐らく佐伯氏の説を継承されてるので両氏は同じ見解の上に立つてをられるのであらうと思ふ。そこで意改の理由を佐伯氏の所説の中に求めると、わたくしが引用文中に傍点を附しておいたやうに、三六九二の前の長歌と、後の反歌とに「山」とあるからこの歌にも「山」とあるべきだ。「島」とあるからこの歌の表現はどうも落ちつかない、と言はれて居る。

この場合も、わたくしは原文通り「島隱り」とあるべきだと思ふ。それはこの歌の「内部的なもの」が万葉詠者としてのわたくしにあたへた直觀であると同時に、やがてその直觀の妥当性は

次の諸項によつて実証されると思ふのである。

①まづ用字の上がら言へば、佐竹氏は「君や山がくれぬる」と「也々」を誤写して「也之」となつたものである。と推論されるがこの場合強力にそれを実証すべき方法なく、卷十五以外の卷から之が「の誤写によつた例を數箇挙げて居られるが、卷十五では同字の繰返へしに「々」を用ゐる例として、「月者倍爾都々」（三六八五）をあげうるが、その他はすべて許己（三六八四）、「多太」（波波）（三六八八）、「都追」（三六九一）、れれ礼礼（三六九八）の如く記述するのを例としてゐる。だから「々」「ミ」を用ゐる公算は小である。

②他の巻の歌に「ミ」を「之」に誤写してゐる例もあるといふことは、この場合の「之」もきっと「ミ」の誤りだと決する根拠としては、強力でない。

③校本万葉集によつて検索してみても、この部分諸本共に全然異同がない。

④原文の體であれば係結法に叶つてゐるが、佐伯説によると例外語法となり、佐竹説では①②の難点がある。

⑤諸説この部分に異論を立ててゐるものなく、眞淵さへもこの「島隱は上の長歌の終の意にひとし」といつてゐる。

⑥巻十五、遣新羅使關係百四十五首の用字を調査したところに挿ると、「島」を表すのに問題の三六九二を除いて、「思麻」二例、「之麻」一四例あり、従つて三六九二原文の……麻都良牟伎美也 之麻我久礼奴流といふ表記は極めて普通、自然の用字法に従つてゐると言へるのに對し、「山」をあらはすのに「夜麻」一例、「山」一五例があつて、佐伯氏が倒置して意改さ

れた用字「也麻」は副使の歌（三七〇七）に集中、唯一例みるのみ、すなはち、「也麻」は巻十五においては特殊な用字例を造ることになるので、佐伯佐竹画氏による意改説は積極性をもたない。

⑦以上六項にわたってのべた意改否定説よりも、もっと積極的意義をもつのは、佐伯氏が意改の必要理由としてあげてをられた前後の歌との関聯に対するわたくしの解釈である。すなはち長歌（三六九一）の結末部「……さむき山辺にやどりせるらむ」とあり、反歌第二首（三六九三）に「黄葉の散りなむ山にやどりぬる君を待つらむ入しかなしも」とあるから反歌第一首（三六九二）も「山隠る」でなければならないのではなく、むしろ却つて反歌第二首に「山」とあるからこそ、反歌第一首には「島」とあるべきだ、といふのである。それはこの長歌の構造から必然的にみちびき出されてきた作者の反歌構成の態度である。長歌において作者子老は「生死も共にとまで思つてゐた君と遙かなる浪路に苦難にたへて月日を過してきた。（第一段）そして家では君の亡くなつてゐることも知らない君の母や妻たちは朝に夕に西の山を望んでは君の旅路の無事を祈つてゐることであらうに。（第二段）それだのに人の嘆きも気にかけぬ君は、ふるさと遠く雲を隔てた壱岐の島の秋の七草にかざられて、異境の山辺に永遠の宿りをなつて悲しいことです。（第三段）といふことを詠んでゐるのである。反歌は長歌との関聯において作られるべきものである。そこで作者は反歌第二首において、現実に、野辺の葬送に立会つたその生々しい感動にみちた印象を表象しつつ、表現の焦点を長歌第二・第三段に合は

せて場面をぐつと絞つたのであるが、問題の反歌第一首の方は長歌第一段の島また島、遙かに心細く共に迎つてきた海の旅路と、背後に恩愛断ち難い家族をもつ死者の在りし日とを結びつけ、心にありありと過ぎこし日々を再生想起しながら歌つてゐるのである。この原文の「島隠り」を「山隠り」と意改したならば、折角の歌の構へは規模の小さな現地の歌となり、反歌第二首と相俟つて長歌第一段を反映する役割を果せなくなる。原文通り「島隠り」であつこそはじめて長途の辛苦にみちた海の舟路を表象しうるのである。

万葉歌の本文批評に今日進んだ国語学の力を借りなければならぬこと勿論ではあるが、しかしながら、それと同時にその作品自体にかくされてゐる作者の心情や意識や作歌事情など「内部的なもの」或ひはそれにつらなる事柄をも考慮に入れる必要があるといふ常識も実践されねばならぬと思ふのである。

——大阪大学助手——